第二章　初期禅宗における理論形成

はじめに

禅宗における菩提達摩の西天からの渡来伝説は実在の達摩に様々な伝説を付与しつつそれを換骨奪胎し、さらにそれ自体が様々に変化しながら従来のシナには見られぬ斬新な実践思想の成立の根拠を説くものであった。その伝来説とはただちにシナへの仏教伝来以来、営々と咀嚼し続けられ構築されてきたシナにおける仏教理解の歴史を全否定しそれらとは全く異なる実践思想であることを主張するという思想史的な動機を持つものであった。

仏教受容の歴史の中でもっとも遅く成立した宗派でありそれ故にもっともシナ的な変容を遂げて成立したといわれる禅宗がインド以来の正系を保持することを主張すること自体が既に大きな矛盾であることは当然のことがらであるが、そこにははこうした意味が内包されていたのである。それでは、禅宗の成立に先行して成立していた旧来の仏教諸宗派と禅宗は如何なる関係にあるのか。そしてそれらを名目上否定した禅宗は自らの思想形成を如何なる形で行なったのであろうか。

前章では、いわゆる禅宗の成立以前の実践仏教の系譜についていささか論述を試みた。ここではそうした文脈の上に立って、初期禅宗における理論形成と完成時におけるそれの放棄という経過をいくつかの術語を中心として考察して見たいと思う。